

「かわいいもの」に対する認識と、「男であること」 の経験との関わりについての検討

—「サンリオ男子」を事例として—

松山 浩太郎

本研究は男性学研究の一環として、アニメの『サンリオ男子』を事例として「かわいいもの」が好きな男子という位置づけを行い、男であることと「かわいいもの」が好きであるということがどのように共存しているのかについて検討することを目的とする。具体的には、アニメの『サンリオ男子』についての表象分析を行い、サンリオグッズ等の「かわいいもの」が好きな「リアルサンリオ男子」にインタビュー調査を実施した。

『男性学入門』(伊藤, 1996)以降、男性学が認知される中で、男性中心社会の中で男性性がどのような文脈を成しているのかについて議論されてきた。その中で、男性性における複数性の観点から、「男であること」に対する経験の語りについての知見が集積されていった。一方で、男性性に孕む加害性に対する認識が不十分であるという平山らの指摘もある。そのため、男性の生きづらさに対する語り終始せず、まずは、みずからの「男という経験」を理論化することが急務であることを指摘している(上野, 1995)。

アニメの『サンリオ男子』を分析することで、「かわいいもの」と従属的男性性が直線的に結びつかない可能性が読み取れた。一方で、現実社会においては、アニメの『サンリオ男子』のようにジェンダー境界を侵犯する構図に至るのは、非常に大きな困難を伴うことが考えられる。そのため、「かわいいもの」が好きな男性を「リアルサンリオ男子」として定義し、インタビュー調査を行った。

その結果、(A)「癒し」という経験と「かわいいもの」が、直接結びつくことで「かわいいもの」が自己認識と違和感がなく結びつくか、あるいは、(B)その間に男性性との葛藤を媒介するかによって、男性であるという経験と「かわいいもの」が好きであることの共存において自己受容の過程を経るか否かの二通りのプロセスがあることが明らかになった。

このことは、「かわいいもの」がその人自身において、どのような文脈として位置付けられているの

かによって、「かわいいもの」と男性であることの経験の結びつき方に大きな違いがあることを示している。一方で、「かわいいもの」への認識の違いとなった、男性性への葛藤が生じるか否かの要因については、今回の調査では十分に明らかにすることができなかったため、今後の課題だといえるだろう。